

TOKYO PAPER

トーキョーペーパー
for Culture
フォーカルチャー

人生には小さくも大きくも勝負どきがある。その瞬間に湧き上がる躍動感、同時につきまとう失敗や後悔への恐れは、この身体にしっかりと染み付いている。1964年から2020年へ。56年という年月を越えて、オリンピックが再びこの街に降り立つとき、私たちは世界の真剣勝負を通じて、身体に染み付いた人生の一片を垣間見るのだろうか。さて、第六号を迎えた『TOKYO PAPER for Culture』。ささやかではあるけれど、前回のオリンピックから今年で50年、という記念の年に敬意を込めて、今号も東京の文化を研究していきます！

In life, we all experience triumphs and defeats, whether large or small. Both the elation that wells up in that moment and a haunting fear of failure or regret are deeply ingrained in us. From 1964 to 2020. When the Olympics land in our city once more after 56 long years, will the sight of competitors from across the globe facing off against each other offer a glimpse of a fragment of the lives in which those bodies are steeped? Welcome to the 6th issue of the TOKYO PAPER for Culture. In this issue, our research into Tokyo's culture pays modest homage to the fact that this year marks 50 years since the Olympics were last held in our city!

第六号 / 006

トーキョースポーター

全プログラム紹介！「東京クリエイティブ・ウィークス2014」

躍動する街、この身体

清水ミチコ(タレント) × 古川日出男(作家) × 為末大(アスリートソサエティ代表理事)

研究テーマ⑥：1964から2020へ

モダンデザイン × 東京オリンピック



1964年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されてから今年で50年。そんな記念の年に想いを込めて、集合場所は原宿駅と国立代々木競技場の間を結ぶ、原宿五輪橋。オリンピック開催時に整備された五輪橋の欄干に刻まれた五輪競技のレリーフや装飾を眺めながら、ざっくばらんに座談会、スタートです！

古川日出男 (以下古川)：東京は、関東大震災や東京大空襲などによってまっさらになってしまいましたよね。もっとさかのぼると江戸時代には街中に大火が頻繁に発生して、その度に街を作り直している。そういう歴史的背景もあって、他の国の大都市と根本的に造りが違うというか、作って壊して作る、というのが、東京の宿命のように思っていて、とにかく新陳代謝が激しい街という印象があります。

清水ミチコ (以下清水)：新陳代謝と言えば、私のレパトリーには、黒柳徹子さんやユーミン(松任谷由実)さん、桃井かおりさんなどいらっしゃるんですけど、みなさん東京出身なんです。みなさん共通して「しょうがないじゃない」という言葉が似合うんですね(笑)。諦めが早いというか「できないのだから次」という感覚が東京の土地柄というか。これは今の新陳代謝のお話と繋がる気がして。

為末大 (以下為末)：面白い視点ですね(笑)。

清水：地方出身の方だと、もう少し粘る、頑張るっていう感じがあるんです。だから東京のカラッとして諦め早く次に行く感じ、それは個性だなと。

為末：以前、都市開発をしている方と話したときに、「東京の特徴は全体を見通さずに、個別にここを埋めなければというパッチ

ワーク的感覚で開発されているのに、いざ街全体を俯瞰してみると、それなりに調和が取れている不思議な街」というような話になって。それがとても印象深かったです。
古川：それ、日本建築の特徴だって聞いたことがあります。設計図を引かずに空間を作って、出来たらじゃあ隣の空間も作って……とかやっていくうちに建物が完成する。その手法は西洋建築と逆らしいですね。

為末：今のお話で思い出したんですけど、最近僕、細胞について面白い事実を知って。

清水：細胞!?

為末：僕は今まで身体のどこかが司令塔になっていて、「あなたは爪になりなさい」とか、1つの細胞に指示しているようなイメージを持っていたんですけど、実際はそうではなくて。細胞は、実は自分の隣の細胞と連携を取りながら、役割を決めているらしい。

一同：へ〜!

為末：これは福岡伸一(生物学者)さんの本(『動的平衡』)を読んで知りました。本のなかでは“細胞は空気を読む”というように書かれています。面白いなって。で、古川さんの東京の家のお話とこの細胞はちょっと通じる部分があるなあと。

古川：つまり東京は、人体のようなもの。

清水：だとしたら、血管が滞りやすいのが欠点ですね。東京は渋滞しやすいですもんね。

一同：笑。

為末：2020年、東京には何が起きているんでしょうね。想像するにはまず1964年のオリンピックで起きたことを知るのがいいと思って調べました。東海道新幹線、首都高速、東京モノレールの開通に、セコム、ホテルニューオータニの創業。冷凍食品がスタートしてデザインの世界ではピクトグラムが採用、そしてオリンピックを



浅井裕介「植物になった白線@代々木公園」 Yusuke Asai “Yoyogi Park Hakusen Project”

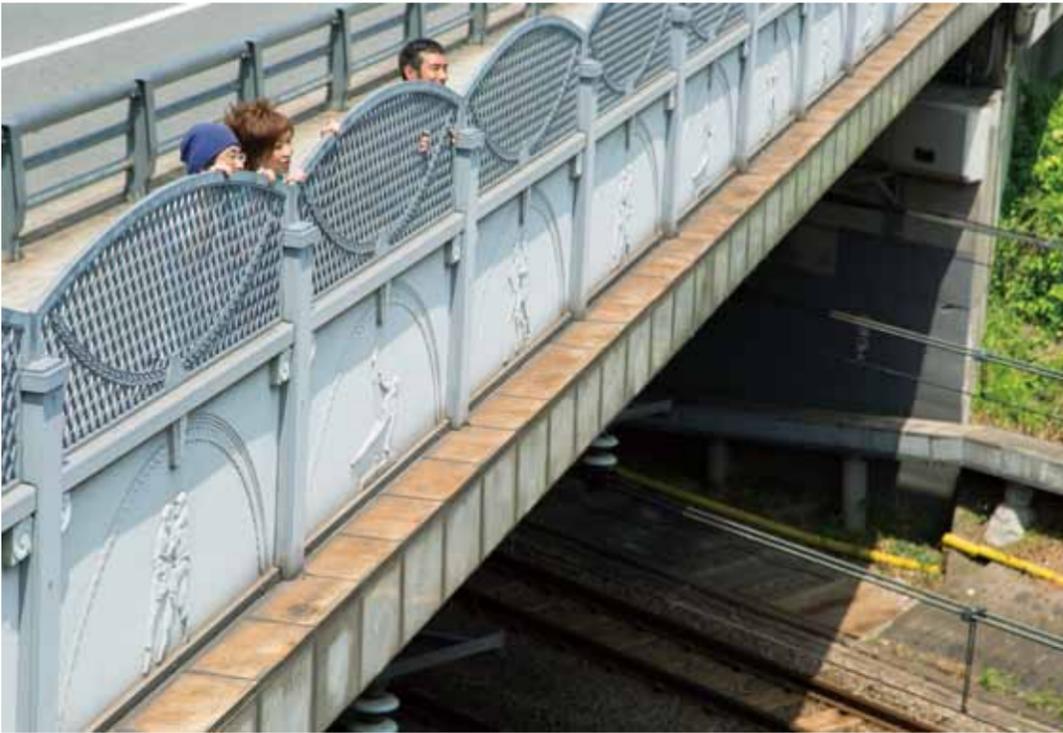
躍動する街、この身体

オリンピック然り、人類の営みのなかで身体活動は高度な文化として熟成されていきました。

そこで今号は定番の研究テーマ“東京文化”に“身体性”を加えて、座談会を敢行！身体と深い親和性を持つお三方、清水ミチコさん(タレント)、古川日出男さん(作家)、為末大さん(アスリートソサエティ代表理事)を客員研究員としてお招きしました。

Physical activity has developed into a form of high culture in human society, as evidenced by events such as the Olympics. To that end, we held a roundtable discussion on this edition's theme, “Tokyo Culture,” with the added nuance of “physicality” thrown into the mix. We invited Michiko Shimizu (entertainer), Hideo Furukawa (author) and Dai Tamesue (Representative Director, Athlete Society), as “guest researchers” to participate in the roundtable discussion. All three have a deep relationship with the physical.





客員研究員の証は
このロゼット！

This rosette shows
that they're our
guest researchers!

Michiko Shimizu

Hideo Furukawa

Dai Tamesue

機にカラーテレビが普及され始めました。

古川：6年後のオリンピックはみんな何を通して見るんでしょうね。テレビでは見えていないかもしれない。

清水：パブリックビューイングのような、集まって見る場所が求められていそう。

為末：個人で見るだけじゃなくて、みんなで見る、ということが大事な時代。

清水：不思議ですよね。個の時代と言われながら“みんな”が好き。

古川：あと生身の力が欲しい時代。

清水：わかります。私のまわりやミュージシャンもライブのチケットは売れているのにCDは売れなかつたりして、今の時代、生の場が強く求められている感じが濃く

伝わってきます。

古川：生身視点でいうと、最近、僕は小説を半分手書きに変えたんです。パソコンだと手癖で何も考えずに書いてしまうようなことがあって、これでは自分がだめになると、万年筆で書き始めて。

為末：認知心理学の実験で、割り箸を口に咥えながら、何か面白いものを見ると、2割増して面白くなるという結果が出ていました。要は割り箸によって口角があがっているから……、

清水：それで脳に面白いと予感させて。

為末：そうなんです。つまり身体が先にしてしまったことによって、脳に刺激が返ってくるっていうのが確認されつつあって。だ

から手で書くというアウトプットの仕方が、古川さんのインプット自体に影響を与えているっていうのは実際あるんじゃないかと。

古川：白紙の原稿用紙に文字を埋める。それは1マスごとにスタートラインが引いてある緊張感があって、そういうなかで書くことが、物語全体に影響する気がします。

清水：あえて自分に負荷を……、

古川：かけたいということですね。

為末：負荷って非効率でもありますよね。でも、そもそも文化は、ほとんどの場合が非効率から生まれている。

古川：走ることもそうですし、お祭り自体が非効率なもの。

為末：そういうなかでグローバルイゼーショ

ンという名の効率化は、文化に対して極めて恐ろしい役割を持っていると思うんです。

古川：その街固有の文化を失ってしまう原因にもなり得ます。

清水：色んなものが効率的になることで、なんとなくその人らしさ（みたいなもの）が失われてしまいますよね。

古川：まさに人間らしさは非効率ですよ。ところで負荷に関する部分でもうひとつ挙げると、走る距離が違えば身体作りも変わるように、小説の上でも短編・中編・長編と書く長さによって体をチューニングして、ちゃんとその長さを走り切るように管理しないと書けないんです。やっぱり人は、突然記録は出せないものだから。



An Energetic Town – The Physical

清水：書いている途中で長距離ランナーのように、脳内麻薬のようなものが出てくることありますか？

古川：ありますね。

清水：その快感たるやほかにないのでは。

為末：それをスポーツの世界では“ゾーン”といいます。夢中の状態のことですね。

清水：私もお客さんの前に立ったとき、「一所懸命練習したんだから、これを観てもらいたい！」ではなく、まずは自分を楽んな状態に持っていきたいと思っています。“お客様は神様”とかがあって思っていると、案外ウケないのに、極端な話“お客さんなんか”と思って自分を適当にしておくと、不思議と自由になれて、それがお客さんにも伝わっていく。その空気をいかにお客さんに共有・共感してもらえるかが、ライブでは一番大事なことです。ステージではピアノを弾く事も多いので、堅くならずにいかに自分をリラックスさせるか、ヘラヘラ遊ばせるような感覚に持っていきけるとなぜか上手くいく(笑)。

為末：無邪気に振る舞うことが、最も人の共感を集めるってありますよね。

古川：相手に合わせないということ。

清水：私の場合、「(モノマネ)そっくりだけど違うじゃん！」っていう、言わば脳の錯覚みたいなものが基本にあって。だから夢中

でその人になりきりはするけれど、作り込みすぎないように気をつけています。お客さんって、滲むような努力を感じてしまうと、これまた笑えなくなるものなんですよ。

為末：今のお話を伺いながら、思ったんですが、僕、人のスピーチを聞くのが結構好きなんですけど、歴史上の重要なスピーチって、ほとんど「I」から始まるんですよ。「I have a dream」から始まって、最後は「We have a dream」になる。だから清水さんの、自分が夢中になる、「I」から始まって「We」になるって、皮肉だけど面白い。

古川：自分と社会の関係を突き詰めると、結局「We」の中に「I」があるという考えになりますよね。僕も読者に気持ちよくってもらうことが最終目的だから。

為末：だけど、浅い領域で「We」を狙いにいくと……、

古川：「I」が目立ちただけになる。それではきっと関係は築けない。

為末：報われない、この社会に受け入れられなくても構わないっていう「I」から始まる「We」が、何か、一番確かで強いっていう。

清水：その「I」は非効率を抱えた「I」。

為末：やっぱり非効率がキーワードかな。これからの東京には非効率が必要である。これでまとまったでしょうか(笑)。



Hideo Furukawa: Looking at Tokyo's history, at its earthquakes, fires and bombings, I feel that its fate is to be continuously reborn. Tokyo gives me the impression of severe renewal.

Michiko Shimizu: I see what you mean – I often do impersonations of Tokyo celebrities, and they always have an air of “It can't be helped”. (laughs) Celebrities from outside of Tokyo tend to be a bit more rooted, I feel. So Tokyo seems to be pretty good at moving on to the next thing when something doesn't work out.

Dai Tamesue: That's an interesting way to look at things. (laughs) A while back, I was talking to someone working in city planning, and what they said really struck me. They said, “Tokyo's not like Western cities – even though it's founded on a patchwork of ideas, if you look at the city as a whole, it's got this strange way of being in harmony with itself”.

Furukawa: I've heard that's a feature of Japanese architecture too. Before they even draw up a blueprint, the architects set aside a 'space', and then immediately move on to the next 'space,' until the building is finished.

Tamesue: That reminds me of something I recently learned about cells. Apparently, cells partner with the other cells around them to divvy up which one does what.

All: No way?!



為末 大
Dai Tamesue

1978年広島生まれ。400mハードルで世界陸上ではスプリント種目・日本人初となる2つのメダルを獲得。オリンピックでは2008年北京大会までの3大会に連続出場。現在、一般社団法人アスリートソサエティ代表理事を務める。

Born in 1978 in Hiroshima, Dai was the first Japanese person to win two medals at the World Championships in Athletics for the 400m hurdles. He's competed in three Olympic Games, the most recent being the 2008 Olympics in Beijing. He is a representative for the director of the General Incorporated Association Athlete Society.

Tamesue: In his book *Dynamic Equilibrium*, Shinichi Fukuoka (a biologist) wrote once that “cells are sensitive to the mood around them”, which I thought was interesting. It kind of connects with what Furukawa story about houses.

Furukawa: So you're saying that Tokyo's like a human body.

Shimizu: In that case, its arteries are probably pretty clogged. Tokyo's got a lot of traffic.

All: (laughter)

Tamesue: I wonder what Tokyo will be like in 2020?

Furukawa: I wonder what people will be using to watch the Olympics in six years.

Shimizu: I feel that there are a lot of cries for the city to increase the number of public viewing areas, where people can gather and watch the Games together.

Tamesue: It's important that you share the viewing experience, rather than watching alone.

Shimizu: It's strange – even though we're living in what's called the 'individual age', the concept of 'togetherness' is still important.

Furukawa: It's also an age where we want some flesh-and-blood power. Recently, I've been writing about half my novels by hand.

Tamesue: Also, a recent psychology experiment showed that people find things 20% more interesting when they have chopsticks in their mouths. Apparently the chopsticks bring the corners of the mouth up...

清水ミチコ
Michiko Shimizu

岐阜生まれ。構成作家を経て、1986年よりライブ活動をスタート。以後、テレビ、ラジオ、映画、エッセイ執筆など幅広く活動。ピアノの弾き語りによるモノマネは圧巻。初の作り込み映像集『私という他人』が発売中。

Born in Gifu, Michiko Shimizu debuted on live activity in 1986. Before her debut she was a writer, a field she still contributes to. To date she's appeared on TV, radio and movies, and her impersonations via solo accompaniment on the piano is particularly famous. Her DVD photo collection, *Me, the Stranger*, is in stores now.

Shimizu: And that tricks the brain into thinking things are interesting?

Tamesue: Exactly. They confirmed that putting the body into action has a direct impact on the brain. Maybe that's why writing by hand helps.

Furukawa: The output method affects the input method.

Shimizu: So...we should burden ourselves...

Furukawa: ...with responsibilities, right?

Tamesue: Well, there's some inefficiency with burden as well. But of course, culture is almost always born from inefficiency.

Furukawa: ...Running's the same. And of course, festivals are nothing but inefficient.

Tamesue: Within that context, I think that making things efficient under the name of globalization has some scary implications for culture.

Furukawa: It's one of the reasons that culture from specific places is being lost.

Shimizu: Right, as things move towards efficiency, the human element gets lost.

Furukawa: To bring burden back into the discussion, when I write novels, I tune the entire structure, the body, with sentence length. If I don't run through the length properly, I'll never be able to write.

Shimizu: When you write, do you get a sort of endorphin rush, like a long distance runner?

Furukawa: Of course.

Tamesue: In sports, that's called “being in the zone”. You get totally focused.

古川日出男
Hideo Furukawa

1966年福島生まれ。1998年に『13』で小説家デビュー。2006年『LOVE』で三島由紀夫賞受賞。代表作は『聖家族』『ベルカ、吠えないのか?』『馬たちよ、それでも光は無垢で』『ドッグマザー』『南無ロックンロール二十一部経』など。

Born in 1966 in Fukushima, Hideo Furukawa debuted in 1998 with his first novel, *13*, and won the Mishima Yukio Prize for his 2006 novel *LOVE*. His works include *Holy Family*, *Belka*, *Why Don't You Bark?*, *Horses, Even Now the Light is Pure*, *Dogmother*, *The 21 Sutras of Rock n' Roll*.

Shimizu: I always try and get that focus when I stand in front of a crowd. To be a bit extreme, it's like I ignore the crowd completely and focus entirely on myself.

Tamesue: It's a little innocent, but that's the best way to get people to feel like you do, right?

Shimizu: Right. But I always want people to say, “It's spot on, but there's something unique there!” when they see my impersonations. So I have to be careful not to get too focused on myself and my craft as well.

Tamesue: That reminds me of something. It's said that almost all of the world's most famous speeches start with “I”. They start with ideas like “I have a dream”, and end with “We have a dream”.

Furukawa: Probing the relationship between self and society, in the end, the “I” is always contained in “we”.

Tamesue: That being said, it can be a little difficult to nail down “we”, since it's pretty vague territory.

Furukawa: You just want to focus on the “I”, don't you? (laughs)

Tamesue: That's why it makes the most sense to start with the “I”, which is divorced from society and doesn't mind, and then work your way to “we”. That's the most certain method.

Shimizu: And it's the “I” that represents the inefficiency we were talking about.

Tamesue: Tokyo requires inefficiency, both now and in the future.